巻頭言

ご存じですか？
Do you know him?

ガストン・バシュラール氏は科学哲学の泰斗として著名だが，詩に関する哲学でも名前が知られている．日本では後者で著名だそうだが，寡聞にして著者は知らなかった．彼の科学哲学は，近年最も人口に膾炙するトーマス・クーンやカール・ポーパーとは対極にあり，あまり知られていないようだ*．私にしてもトーマス・クーンの「科学革命の構造」は学生の頃に読んだ．手元にある本は 1979 年 1 月発行の第 9 刷である．「パラダイム」理論は一世を風靡した．懐かしい思い出である．その後，業務に忙しくこのような哲学，といっても科学哲学だが，は忘れていた．もはや，研究者としての仕事は終わりに近づいている．こうなってくると，自分の研究やその応用である（と本人は思っていた）標準化の基盤が気にかかる．いったい何を目指して忙しくやってきたのか？考えなくてはいけないこととも多々あったのに棚上げして，論文を書いてきた．大部分は今でも理解不十分な点があり，冷や汗ものだが．同時に，その途中で考える（理解する？）のをやめてしまった事柄が気になって仕方がない．こんな時にガストン・バシュラールの本に出会った．哲学的なことはさておき，「蝋燭の焔」（現代思潮新社）がとてもいい．これはエッセイ集なのだが，この最後の章に感銘した．

思考すること，これは蝋燭の光届く範囲であり，そこに置かれた白紙に書くことによって思考が始まり，その暗闇よって増幅される．と私には読めた．何にもまして，その孤独と，とても及びのつかない事柄への思考の挑戦，難しければ難しいほどいい．その文章から立ち上がってくる孤独と，たぶん年齢から来るのだろう，その情熱と焦燥．論文にしょうとは考えていないだろうし，「なる」ものしか考えてもいない．筆者が考えてこなかった事柄が多々あろう．たぶんこの孤独と情熱をもって，臨むこと．これがいつしか置き忘れて来たものであろう．光の届く範囲は，現今では制限するのは簡単だが，かつての蝋燭やランプではない．忘れていた．暗闇との境でノートを広げ，その白紙の上に 1 行を書きだそう．…非弾性散乱に関する総説．やはり，バシュラールにはほど遠い．

田沼繁夫（物質・材料研究機構）

*ガストン・バシュラール，トーマス・クーン，カール・ポパーの科学論に関しては Wikipedia を参照されたい．ポパーだけがとても詳しく，最も著名だと思っていたクーンの記述が少なく，ちょっと意外．クーンの与えた衝撃については佐藤文彦氏の「職業としての科学」（岩波新書）に詳しい．

Copyright (c) 2014 by The Surface Analysis Society of Japan